

人間の思考は大きく分けると二つしかありません。「機械論的にものを考えるか」、「生命論的にものを考えるか」です。そして機械論的思考が分離思考で、生命論的思考が統合思考になります。

(16世紀以降の近代文明はこの機械論的思考・分離思考をモデルに発展してきました。しかし昨今、社会のあらゆるところでその弊害が出てきています。21世紀の新たな思考モデルが必要になってきている状況です)。

① [機械論的思考]

まず機械の特性として「設計する人と作られる機械とは別々の存在である」ということです。「設計する人」と「機械そのもの」とは「別々の存在」だからです。これが機械の基本的な特性です。このように「自分と相手は別々の存在だ」と考えることを**分離思考**といいます。この特性を前提として、機械には次の二つの特徴が出て来ます。

第一に、「機械は設計の段階で性能が決まってしまう」ということです。設計図で機械の価値が決まってしまうのです。「生まれた時点で運命が決まってしまう」という考え方です。しかも「作った時点がいちばん性能は良い」のです。機械は出来上がったときから中古品になって劣化して行くわけです。

第二に、「機械そのものでは、機械は作れない」ということです。設計するのは人間です、設計されるのが機械です。つまり「機械は自分で自分を作れない」という特徴があるわけです。換言すれば「機械は、自主性・主体性を持っていない」ということです。

人間がものを考えるときに、機械的にものを考えたら自主性がなくなるということです。誰かに言われて仕方なく動く行動パターンです。設計者から言えば、自主性を持たせないということです。設計者の考えを押し付けるということになります。

繰り返しになりますが、機械そのものは自分で自分を作れないので、自主性がない、主体性がない、創造性が出てこないということになります。「言われたことを言われただけしかやらない。決められたことを決められただけしか対応しない。教えられたことを教えられた通りにしかできない」、逆に「自分の考えを押し付けて、相手の意見や自主性・主体性を認めない」という、これが機械的思考の特徴です。

② [生命論的思考]

生命の基本的特性は「進化していく」ということです。生命は誕生した時から「進化」が始まります。自分の力で成長していくということです。生まれた時と成人した時は大きな違いができます。

ここから言える第一の特徴は「生命というものは自主性・主体性をもって生きている」ということです。「自主的に主体的に意思がそこに反映して行く」ということです。

第二に言えることは、「生命は出逢うものによって、次々と自分を変えていく」というこ

※ 無断での複製転用は禁止しています。マネジメント寺子屋「日新塾」1/2

参考資料：経営人間学講座（02.3.思想・価値観Ⅲ）

とです。Aというものと出逢ったら、Aと出逢った本人自身が新たな自分を見出して出逢った相手との関係を創り変えていくのです。自分を変え、相手との関係をドンドンドン創り変えていくのです。その次のBという運命と出逢うと、新たに全くこれまで出逢った事のない自己、新しい関係構造を創造して行くのです。命を持っている生命体というものはそのような特徴があります。

③ [生命のメカニズム]

生命というのは不思議なメカニズムを持っています。

第一に「一つの生命の中に無数の細胞が存在する」という点です。そして、一つ一つの小さな細胞同士が関係性を創って全体としての一つの生命を守っています。生命はその生命の内部で、さまざまな細胞の要素が集まって協力しあって生命を保っているということです。「生命自身の内部の細胞が集まって生命体を支えている。その細胞と細胞の関係です。この関係が非常に協力的だ」ということです。

第二のメカニズムは「生命体が外部の環境に向かって働きかける」という点です。自分の存在している環境に向かって影響を及ぼそうとします。ある一つの秩序ある関係を創ろうとしていきます。そして生命体自身が、その関係の中で守られるようになるのです。

④内と外との関係性

「個々の細胞から一つの生命体としての機能が守られている」と同時に、「生命体はその周囲の広がりある環境との関係で共存する・共生しあう・助け合っている」ということです。その生命体が環境に向かって、強力に働きかけをして行きます。そして、その環境がこの生命体と協力し合って、その生命体の存在がより強力な力に支えられる形で環境との関係が深くなって行くのです。その結果、内と外の二つの関係性が構築されるわけです。

生命体というのは、「生命体の内部の、要素と要素の関係性を強化していく」ということと、「外に向かって、環境全体と一個の生命体との関係性がより緊密な関係になるように、もの凄く積極的に働きかけていく力を持っている」のです。このような生命体としての思考を哲学では『有機体思考』と言っています。

⑤ [生命論的思考・有機体思考は関係性構築の思考]

有機体思考は関係性構築の思考です。逆に機械論的思考は自己主張・無関心の思考です。「自分の意見を強引に述べる、相手を見捨てる」のが機械論的思考です。これは一方だけの意思になります。ところが、生命論的思考は関係性構築なのです。それは「出逢うものと自分が非常に密接な関係の構造をつくることによって、新たな価値を生み出していく」という考え方です。これを「統合思考」と言います。「自分と人生で出逢う相手との関係が、よりよい関係になる。両方にとって、より望ましい・好ましい関係に出逢いの関係を創って行く思考・ものの考え方」これが統合思考です。

※ 無断での複製転用は禁止しています。マネジメント寺子屋「日新塾」2/2

参考資料：経営人間学講座（02.3.思想・価値観Ⅲ）